

知 覺 と 想 像

務 臺 理 作

知覺と想像は如何にして區別せられるのであるか。吾等が現實に見る青い花と夢にみ想像に描く青い花とは如何に異なるであらうか。吾等の常識に即すれば二者の區別は明かであつて決して夢と現實とを混同する惧はないと思はれる。然し何を標準として二者を區別すべきかを仔細に反省する時吾等は尠からず當惑するであらう。ヒュトムはその著「人性論」の初めに於て二者の區別——印象と表象の區別は、その持つ強さ及び生き々々しさの程度に存することを述べ、暗きに描く赤の表象と日光の許に見る赤の印象の相異は本質に在らずして程度に存すること及び單一表象は必ず單一印象に相應しその模寫として後者を再現し且また後者を原因として由來することを述べてゐる。常識に即して進める人々はこれ等の點にさまで疑ふべき處ない如く思ふであらう。ジエトムスがその著「心理學」に於て想像に

就いて考ふる處も、たとへヒユームの考を Atomistic theory として排してゐるにせよ、感覺を原像とし、想像を模寫とする點については同様である。知覺と想像は果して「生き々しさの程度」に由りて説明せられ、また二者の關係は原像と模寫、原因と結果の關係によつて十分明かにせられるのであらうか。

ヒユーム及びそれを緩和するにせよ、根本に於て猶程度や模寫の概念に由り二者の關係を考へんとする人々に對して次の二點より批判を加へて見たいと思ふ。その第一、ヒユームは二者の區別を「強度の度合」に求むると云ふのであるが、「強度」とは何を意味するのであるか。それは知覺内容及び想像内容の持つ強度を意味するのであるか。若し二者が直接程度について比較出来るものとすれば、一者の強度を減ずることにより、或は他者の強度を増すことに由つて限りなく二者の接近することを認めねばならない。然し吾等が蟲の音を知覺する時、その音の次第にかそけくなるに伴れて漸次蟲の音の想像に接近すると云ひ得るであらうか。如何様に内容の強度を減ずるにせよ、知覺は常に知覺でなければならぬ。想像についても同様である。想像が知覺に移り得るならば、もはや幻覺を知覺より區別する必要もないであらう。のみならず、想像内容は知覺内容の持つ様な意味では何等の強度も持たない

と考へることも出来る。何となればその内容は現實に存するものではないからである。若しその内容にも何等かの強度あるものとすれば蟲の音の單なる表象は常に風の音の表象より弱く、月の光の單なる表象は星の光のそれよりも強いと云はねばならぬのであらう。然し時に蟲の音の表象が風の音の表象より強くして殆ど幻覺に近づき、月の光の表象が星の先の表象より遙かに弱いことあるは疑ふべくもない。且また他方より見れば内容は知覺せらるゝと想像せらるゝとに關せず同一であるとも考へられる。暗さに想ふ太陽は現實に見る太陽と同一でなければならぬ。若し二者の間に強度の差があり得るとしてもそれは同一内容より以外のものに附せられねばならぬであらう。孰れにせよ内容の強度に由つて二者を區別せんとすれば何等かの不合理に陥らねばならない。然らば二者を如何にして區別すべきであるか。これを内容に求め得られぬとすれば作用そのものに求むる外はない。同一の内容が時として想像せられ時として知覺せらるゝことを思へば、二者の相異は對象的なる側に存せずしてこれを把握する作用の側に存するものと認めねばなるまい。寔に知覺と想像の相異は知覺作用想像作用の特色そのものに存するのである。ブレンタノ學派の言葉で云へば對象に對する志向關係に於ての相異即

ち内在的意味の相異に由つて明かにせられねばならないと思ふ。

次に第二、知覺は想像の原像、想像は知覺の模寫であり、順つて二者の間に原因結果の關係あると云ふのであるが、粗朴なる經驗に即すれば、たとへば、*Nihil est in intellectu, quod non prius fuerit in sensu*” と言ふ言葉の *sensus* と *intellectus* に代ふるに、知覺と想像とを以てすれば、謬りないと考へるであらう。豊かなる詩人の想像もこれを分析すれば、その要素をすべて一度は現實に知覺せるものゝ中に見出し得るであらう。ダントやミルトンが描ける永劫に燃ゆる地獄の焰も、厨に燃ゆる火の印象の模寫であり、天馬の羽も、鳶の翅の知覺より、籍り來れるものとも云ひ得るであらう。觀念の間に原因結果の關係を考ふる限り、吾等の單一表象は模寫像より外には新なる要素を創生し得ぬ筈である。然し時間的實在的關係の許に想像の要素を知覺より由來せしむることが想像と知覺が各自らの特性に由つて成立する所以のものを、闡め盡すことであらうか。意識現象の本質は、その實在的生成には存しない。意識の特色は、全一の相に存するからである。恰かも一の建築の藝術的特色が、その素材又は素材の由來に存せずして全體として完成せる形相に存すると同義である。地獄の想像は、地獄そのものが想像せらるゝことの意味より、明かにされねばならない。地獄

の焰や苦みが吾等の現實に於て嘗て一度經驗せしものより由來すると云ふた處で永劫の焰と水劫の苦惱が詩人の想像に與ふる深き意味を如何にして明かにすることが出來やう。地獄の想像の深き意味はその生成由來に存せずして想像が志向する地獄そのものへの關係に存しなればならない。かく考へ來る時は知覺と想像との内面的關係は、その時間的生成的關係の許に求むべきでなく又内容の強度と云ふ如き外面的の相異に求むべきでなく獨り内在的意味の比較にのみ求むべきであること自ら明かであらうと思ふ。

—

凡そ知覺の特異性として第一に考へらるゝものはそれに於ける對象の直接的自己顯在 (unmittelbares Selbstgegenwärtigsein) と云ふことであらう。知覺するとは吾等の前に直觀せらるゝものあつて始めて許し得ることである。然しながら對象の自己顯在とは如何なる義であるか。知覺の對象は常に一の命題、余は樹木の立てるを見る「余は空の青きを見る」「余は鳥の啼くを聞く」「余は花の匂を嗅ぐ」或は「余は自らの悲みを感じ」と云ふ如き形にて示される。マインング學派の人々の言葉に由れば知覺

の對象は單なる客體客體に非ずして客體的客體的なるものである。然しながら此派の人々の云ふ如く客體的なるものは客體の上に組み立てられそれに由つて基礎附けらるゝ高次の對象として常に客體客體なるものであるならば如何にして吾等の眼前にしかく顯現し得るであらう。知覺の對象は自體としては客體客體的でありながらしかも吾等に直觀せらるゝと云ふならば其處に知覺を單なる表象や本來の判斷より區別し得べき何等かの特異點あらねばならぬ。知覺體驗を分析すれば知覺の表象と判斷となる。直觀像をそのまゝに支持する作用が表象かゝる直觀像に由つて直觀せらるゝもの即ち知覺せらるゝものを思念する作用が判斷である。命題の形にて示さるゝ客體的なるものが知覺せらるゝと云ふのは二者の如何なる特質に負ふのであらうか。このことを明かにするために聊か精細に知覺の分析を試みたいと思ふ。

知覺表象の對象は單なる感覺對象ではない。感覺對象は純粹なる相に於ては色自體音自體と云ふ如き性質者の系統である。色は色圈に於て連續的完結を保ち、明暗飽和の度に於て一定の方向を持つてゐる。かゝる色自體の世界は何處迄も *ideal* なもので顯在すると否とに關せず純粹對象界に自らを支持するものと考へられる。吾等が眼前に在ると云ふ色例へば花の紅、空の紺青はかゝる自體としての色ではな

く委しく云へば「赤くあるもの」「青くあるもの」である。ものは一般に一の性質と他の性質の結合に由つて成り立つ。性質赤が赤くあるものとなるためには視覺的空間と結合し特定の明暗飽和の度と結合し特定の形と結合し更には匂や柔かき感じなど、結合せねばならない。性質と性質の結合に由つて純粹性質は甫めてもの、屬性となるのである。

要素と要素が結合して要素の間に見る能はざる特色の現はれたる場合かゝる特色を夫れ等の Gestalt と呼ぶ。Gestalt は單なる要素の集合でもなく又それ等と並立すべき第三の要素でもない。夫れ等とは全然次元を異にしつゝ猶夫れ等に由つて成立する高次の對象である。すべて一と他との結合と云ふのは正しき意味でかゝる Gestalt を意味せねばならない。性質と性質との結合はかくして一の Gestalt であり順つて知覺の對象は常に高次の Gestalt となければならぬ。「花が赤」「空が青」と観ずるのは、赤のみならず青のみならず赤くあるもの、青くあるものを一の Gestalt として観ずるのである。音樂を聞く場合の如き最もよくこのとが理解されると思ふ。旋律は個々の音や複雑なる時間的條件の上に現はるゝ高次の Gestalt である。旋律が個々の音の集合でなくまた第三の音でもなきことは、同一の旋律を異なる音

階の上に移して猶著しき等一性の見出るゝこと又旋律の再^{レフエウのチオン}生に於てその基礎となるべき音は以前のものと全然異なるに係はらず猶同一の旋律として知覺せらるゝこと(Ehrenfels, *Über Gestaltqualitäten*, Vierteljahrshchr. f. wissenschaftl. Philosophie, 1890, S. 25-262) に由つて明かである。Gestaltの世界は性質の結合體としてマイノングの所謂 *Sosein*の世界に屬する。*Sosein*の世界は *Sein*(Bestund, Existenz)の如何に關係なく *Sein*の彼岸に立つ純粹對象構成の世界であると云ふのであるが、かく自體として *ideal*なものが音の奇しき旋律となり色の妙なる配合となつて吾等の前にしかく直接に顯現するのは不思議と云はねばならぬ。「直接的に自己顯在する *Sosein*」とは如何なる謂であらうか。

對象學的に考察すれば旋律や形像の基礎たる音や色は感性的なる對象として他の非感性的なる數や關係の如き對象と區別せられる。音や色は自體としては純粹に *ideal*なものであるが他の性質と結合して自らを限定する時結合點たる具體者の屬性となつて現はれる。これ感性的なるものゝ本質である。旋律は感性的なる *Gestalt*として直觀像を顯現せねば已まない。直觀あつて初めて自らを支持することが出来るからである。それ故知覺の表象作用とは感性的なる *Gestalt*をば眼前にかく

あるものとして直観することである。即ち直接的に自己顯在する *Wesen* は常に感性的なるもの、*Wesen* であり、*Wesen* である限り直観せられると云ひ得るのである。勿論此處に知覺對象が *Gestalt* として感性的に顯現すると云ふことは、對象がしかく此處又は彼處に存在すると云ふのではない。「存在する」と云ふのは一の判斷あつて甫めて許さるゝことである。妙なる色奇しき旋律はこの世に存在するものとして直観せらるゝのではない。直観せらるゝものが此世のものなるか乃至あの世のものか余は未だ判定する處ない。只余は色のうるほひ旋律の流れの中に身を任せてしかくあるものとして直観するのである。このことは例へば繪畫を觀照する場合其處に現はされたるものが果して現實に存在するや否やを問ふ處なく單にかくあるものとして直観するに過ぎないことを思へば明かであらう。かく *Gestalt* が存在より自由にせらるゝと云ふのは、直ちにそれが純粹なる *Wesen* であると云ふのではない。感覺對象や幾何學形の如きものは存在より自由にせらるゝと共に純粹なる *Wesen* として *ideal* の範圍に屬すると考へられる。然し旋律や形像の如き *Gestalt* は存在するものならざると共に直観像に於て吾等の眼前に顯現せねばならない。 *Wesen* は等しく *Wesen* でありながら基礎となるもの、感性的に従つて吾等の前に

最も直接的に顯現すると云ふことが知覺對象なる Gestalt の特色である。即ち知覺表象はその對象が容體的なる點に於て感覺や單なる表象より區別せられ他方に於ては存在に關し何等の抗束なき點に於て存在判斷より區別せられる。かく Gestalt の直觀作用は他の *ideal* なるもの、抽象的なるもの、表象又は單なる基礎の表象と區別を保ちつゝしかも判斷ならざるものとして、マイノングが表象の中に數へたる創生表象 (Produktionsvorstellung, Meinong, Über Annahmen, 2Auffl. S. 11) 或は ヴィタセクが特に名附けて Gestaltvor-Stellung, Witasek, Grundlinien d. Psychologie, S. 233) と呼べるものが最もふさわしい名稱であらうと思ふ。

* マイノングの著書を讀める人の誰しも知る如く氏は容體的なるものは判斷及びアンナーメに由つてのみ把握せられると云ふのであるが、これには種々の論議を生ずる處である。余はオブエクティブ特に *Soseinobjektiv* が *Wisein* を示す限り直觀せられ得るものと考へ、かゝる直觀作用をば如上の名稱を以て呼びたいのである。

吾等が正しき意味で知覺と云ふならばそれは唯に一種の表象體驗たるのみならず更に知覺せらるゝものに就いての判斷を含むと云はねばならない。知覺は Gest-

此の創生表象であるのみならずその中に含まるゝ対象そのものへの思念を伴ふからである。吾等は Gestalt を直観するのみならず更に対象自ら吾等の前にしかく顯在することに對して確信を持つからである。対象顯在の確信は即ち対象の實在又は存在の判斷である。全一としての知覺體驗は Gestalt の創生表象と知覺せらるゝものゝ存在判斷との結合體である。

一般に判斷の対象は意味を持ち意味は命題の形にて示される。「甲は乙である」と云ふのは命題でそれに由つて甲と乙との關係が意味附けられる。知覺もまたその対象を命題の形にて示し得ることは已に述べた。余は空の青きを見ると云ふのは知覺せらるゝもの、直観せらるゝものへの意味を表はす命題である。然し「ものがかく、あることを知覺する」と云ふのは、一般に「ものがかくあるとを判斷する義と同一に取扱ひ得るであらうか。普通の判斷は肯定否定の對立を持ち更にその孰れかの決定に對する確信又は證認 (Überzeugung) を持つ。対象の本質に就いても同じく positiv と negativ の對立がある。「甲は乙である」と云ふポジチブな「客體的」を肯定し若しくは否定しそれに就いて他に翻がへり能はざる確信を持つ時余は甲は乙なることを判斷したと云ふ。然し知覺判斷に就いて特に注意すべきことはかゝる肯定否定の對

立を缺除して常に肯定のみであることである。吾等はこの花が赤いと知覺しこの空が青いと知覺するが、赤からざる花「青からざる空」を知覺することはない。かく云へば或る論理學者の主張する如き「赤ならざるものは赤一般、かくして色一般に關して全然無規定であるものを意味するのでなく、他の積極的なる色例へば青とか綠とかを意味すると云ふ思想と連結して「赤くなき花」の知覺は他の「青い花」或は「黄色の花」の知覺を意味するとが出来ると主張する者があらう。然しながら「赤き花」の顯在を否定することなくして如何にして「出赤くなき花」の知覺が直ちに「青き花」の知覺を意味すると云ひ得るであらう。而して赤き花の顯在を否定することは赤からざるもの、知覺に非ずして赤きもの、知覺の否定である。赤きもの、知覺の否定は新しき第二の知覺に非ずして單なる否定判斷に過ぎないのである。對象の直接的なる自己顯在が特色である以上かゝる顯在者を離れてしかく顯現するものなきことを如何にして更に知覺することが出来やうか。已に知覺すると云ふならば必ずその對象が現實的に知覺せらるゝことを許さねばならない。知覺判斷は直觀像のみならず直觀せらるゝものがしかく顯現することに對して、夢でなく幻でなく又單なる想像でもなく疑はんとして疑ひ得ざる確信である。余はこれと面しては余りに生

き々としてゐるために、余りに直接的であるために、又吾等がこれを逃れんとしてしかも瞬時も逃れ去る能はざる迄に吾等の全意識を力強く支配する抗束力あるために吾等は籲らんとして籲かへる違ないのである。これを否定するには余りに面と向ひ合つてゐる。吾等眼を開けば何ものかを見ねばならず耳を澄ませば何ものかを聞かねばならぬ。肯定あつて否定の余地なきはこのためである。現實に對する確信の強いのも實にまたこれがためである。

知覺に於て否定判斷の許されざるは知覺對象の本質よりも亦明かにすることが出来る。性質と性質との結合に由つてかくあるものが現はれる。かくあるものは對象的には「もの、それは赤くある」もの、それは形を持つ「もの、それは句がある」と云ふ如き形にて示される。赤くあり形あり句あるものが唯一の具體者と思念せらるゝ時赤き花が句ふと云ひ得るのである。かくあるものが感性的なる Gestalt に於て知覺せらるゝならばかゝる *Wesens* が先づ直觀されねばならない。かくして *Wesens* は顯在的なる *Wesens* となる。然るに吾等は「もの、それは赤くなく、ものそれは句なき」とを直觀出来ない。何となれば赤くなきもの句なきものは非 A の形にて示さるのであるが、それは A (*Gestalt*) とは次元を異にせるもの、順つて知覺の範圍外に屬する

ものだからである。かゝるものを直観し得ざること明かである。それ故に Gestalt は常にポジチフなる屬性を持たねばならないと云ひ得る。音楽に於ける休止點が、積極的なる價值を持つのもこの故であらう。

知覺判斷がかく常に肯定的であること、關聯して知覺判斷を本來的なる判斷の肯定より區別せしむる重要な點が見出される。薔薇の花を見て赤くあることを知覺するのは一般概念赤の許に體驗せる色の表象を置いてそれが赤いと命名するのではない。知覺は一般概念に關係する處なく従つて直観より獨立せる意味を持つことない。知覺は常に對象の *Wissen* を示すのみで、*Wasein* に關係しない。花が赤く空が青いことを知覺するけれど、花の色を「赤」と呼び空の色を「青」と云ふことを知覺しない。知覺は命名判斷ではないのである。知覺判斷に就いて重要なことは余に「顯現する直観像に於て知覺せらるゝものがかくの如く存在すること」を、余の直観するものの範圍に於て、只その範圍に於てのみ思念することである。これを或る他の *Klass* の許に順序附けんとしてまたこれを他の對象と比較して何事かを斷言せんとするのは知覺判斷を超えたるものになることであらう。知覺判斷を純粹の相そのまゝに言表することは極めて困難と云はねばならない。

それ故に知覺判斷の意味は普通判斷の如く命題が表はす意味のみに由つて明かにすることは出来ない。例へば「月は明るく照る」と云ふ命題はそれ自身にて考ふれば *Wesen* に關する判斷對象として肯定することも否定することも可能である。月は明るく照る場合も照らぬ場合もあるからである。然し若し余が良夜に於て現前に直觀する月につき「月は明るく照る」と斷言するならばこれに對する否定は許し得られぬであらう。即ち後に於ての命題は知覺特有の意味を言表せるものになる。知覺判斷に於て重要なことは對象の直觀と知覺判斷を言表する命題の意味が正しく契合することである。

余は繰返して知覺判斷は知覺せらるゝものゝ存在することに關する確信ゲラウペンに外ならぬを述べた。然し此處に云ふ存在の確信即ち存在判斷は未だ余の云はんと欲する處を十分表はし得ぬと思ふが故に少しく論究を加へて見たいと思ふ。知覺判斷を以て存在判斷とするに就いてはブレンタノ (*Psychologie vom empirischen Standpunkte*, Buch II. Cap. 3²³)、ハイノング (*Über Annahmen* S. 270)、リッペンズ (*Bewusstsein und Gegenstände*, S. 37) 其他ヘフラー、ヴィタセク等の一致する處である。ハイノングに由れば直觀的と非直

觀的との對立は一見その對象の特質に求め得べきが如く見ゆるも同一の對象が時として直觀的に時として非直觀的に表象せらるゝ故に、二者の對立は表象の *Zusammensetzung* と *Zusammenstellung* との對立に歸する。而して知覺表象の對象は存在判斷に由つて把捉せらるゝ具體者として、感覺對象はかゝる具體者より抽出せる性質として示すができ前者は *Seinsmeinen* 即ち存在判斷に由つて直觀的に、後者は *Soeinsmeinen* に由つて非直觀的に把捉せらるゝ。 *Etwas, das schwarz ist* について *Etwas* は存在判斷の對象となるが *das schwarz ist* は性質者として *Soeinsmeinen* に由つて把捉せられる。而して *Etwas* の存在を判斷する以前に余は已に *schwarz sein* を思念せねばならないが、未だ判斷せられぬ以前即ち判斷對象構成以前に於けるこの思念はアンナ・メでなければならぬ。即ち知覺判斷はその存在にのみ關する思念であつて、その性質規定はアンナ・メに由らねばならぬと云ふのである。かくマイニングは知覺判斷は存在判斷で性質 (*Wiessein*) の思念ではないと云ふのであるが余は知覺判斷と對象の直觀とが正しく契合する限り對象の持つ性質が結合點に限定せられたるものとして、非直觀的なる表象の *Zusammenstellung* に由ることなく、知覺判斷そのものに由つて直接規定せられ得るものと思ふ。マイニングに由れば「黒くある」

と云ふことが假定アンネキムせられて甫めて「かくあるもの」の存在が判断せられると云ふのであるが、その「黒くあること」が知覺せられずして如何にして黒くあることの直觀と「かくあるもの」が存在すと云ふ判断の意味とが契合し得るであらう。「かくあるもの」が存在すると云ふことは、そのみにては決して直觀的ではない。何となれば存在せぬとも云ひ得るからである。然し知覺判断が否定を持ち得ぬと云ふことは「黒くある」と云ふ顯在的の *Sein* の直觀と契合する限りである。若し二者契合の契機が失はるゝとせば知覺判断は普通判断となつて否定を持つべく性質の *Sein* は創生表象の對象として美的印象の如きものとなるであらう。赤くあり匂あるを知覺せずんば如何にして眼前に花の存在することを確信し得られやう。

「勿論マインングは直觀と意味とを引離して知覺判断は本來の判断であると云ふのではない。氏も繰返して知覺判断は現實的肯定なることを述べ又知覺判断に於て *Sein* の *implicit* に規定せられねばならぬこと順つて *Seinsnehmen* も *Seinsnehmen* にかくして結局アンナトメに還元せられると云ふ如き重要な思想を述べて居るのであるが、知覺の存在判断に *Sein* の思念が含まるゝと云ふならば同じくまた *Sein* の思念に於て存在の判断が *implicit* に含まるゝとも云ひ得るだらう。「花が赤くある」

と「赤い花が在る」とは獨立せる意味に於ては明かに區別せらるゝが獨り知覺に於ては唯一の體驗の異なる言表ではなからうか。(ブレンタノが一般的なる *Sosein* の判斷は存在判斷の形になし得ると云ふのは、知覺の範圍にのみ許し得ることを一般的に不當擴張したものと思ふ。寧ろ知覺に於ても存在判斷を *Sosein* の判斷になし得ると考へるがよいのであらう)。花が赤いと直觀するのは勿論 *explicit* に *so sein* を規定するではない。然しかゝる *implicit* な思念の中には赤くある花の存在を含んで居るではなからうか。如覺の對象に於いて *Sosein* と *Sein* との結合してゐること、其處に知覺判斷を普通判斷の肯定より區別せしむべき重要な契機が潜んでゐるのである。即ち余は此節の終りに於て知覺判斷は對象の直觀と契合する限り *Sein, Sosein* に關する現實的肯定的判斷であり、また現實的肯定的判斷に由つて甫めて對象は知覺せらるゝことを主張したいと思ふ。

三

以上述べたる如く知覺の特質が對象の直接なる自己顯在に關する確信、即ち對象存在の判斷に存するとすれば知覺はまさに此點に由つて想像より區別せられぬば

ならないと思ふ。ありのままなる經驗に即して云へば知覺に於ては常に對象の自己顯在があり對象自身が直接吾等の前に在るのであるが、この特色は想像に全然缺除してゐると考へられる。吾等が現前に見る薔薇の花は疑ふ處なく顯在するが心に描く薔薇の花はしかく顯在する處ない。かく云へば誰しも二者の區別は何等の餘地を残すことなく判明であると考へる。然し仔細に反省すればかゝる區別は想像の消極的特色を擧げたるに過ぎない。單に消極的の區別である。吾等は更に進みて想像の積極的特色を見出しそれに由つて知覺と想像との關係を積極的に規定し得ぬであらうか。

想像の積極的特色は他の心的作用と同じく內在的對象への關係に存しなければならぬ。一般に何ものかを知覺せずして單に想像すると云ふのは知覺と異つて對象を全く持たぬと云ふのではない。作用が知覺より想像に移ると云ふのは以前にありし對象を失ふの義ではない。知覺に於ては對象の自己顯在がある。想像はかゝる對象がもはや自己顯在することなきことを想像するのではない。想像は對象が存在するとせざるに關せず對象に對する積極的の關係を持つ。知覺が知覺内容としての直觀像を思念するのでなく直觀像の範圍に於て直接意味せられたる對

象を把捉する如く、想像は想像體驗上顯はるゝ内容——即ち對象の想像像を思念するのでなくその裡に含まれたる對象、そのものを把捉することは疑ない。例へは昨日見し薔薇の花を想像に於て把捉すると云ふのは、その印象の單なる再現に非ずして印象に即してしかも印象を超えたる對象薔薇の花そのものを想像することである。されば若しヒュームの所論に従つて「催眠や熱病や狂氣や或は心の激しき感情に於て表象は著るしく印象に接近すること」が許し得らるゝにせよ、それは表象の單なる内容像が強度を昂むる結果知覺の内容内容像に接近到達するものと認むべきに非ずして、表象の内容内容像に於ては單に浮動してゐたに過ぎない對象が、自己顯在の程度を漸次昂め來るの意味、順つてヒュームの所論を許容するとしてもそれは内容内容像の強度でなく對象存在の程度につきて云々するのであることの意味を認めねばならぬであらう。已に同一の對象が始めに於ては浮動の様相に於て次には顯在すべく著るしく強度を昂むると云ふならば、知覺に於て思念せらるゝ對象が已に想像に於ても何等かの意味で支持せらるゝことを認めねばならない。かくの如くにして知覺の本質と比較すべき想像の特色は後者が如何なる意味を以て積極的に對象を把捉するか存するのであらう。

然し乍ら余は此處で一の逆理に陥らざるを得ない。對象は二者に於て同一である。現實に見る薔薇の花も想像に夢みる薔薇の花も薔薇の花としては同一である。然しながら他方に於て消極的に知覺と想像が對象の自己顯在するとせざるとに由つて區別せらるゝと云ふならば對象は二者に關して相異すると云はねばならない。何となれば一に於ては顯在すると云ふ意味を持ち他に於てはそれが許されぬと云ふならば二者は已に内在的意味を別にするのである。そは即ち對象を異にすることであらねばならない。想像に於て對象自らの顯現はなくとも對象を失ふのでなく顯在如何に關せず對象は知覺と同一であると云ひ、他方に於てまた對象の相異があらねばならぬと云ふのは一の逆理である。而して此逆理を解決する鍵は一に想像體驗の積極的本質を明かにすることに存してゐるのであらう。

凡そものを想像すると云へば必ず想像せらるゝものと關係する。余の眼前に亅む一の樹立を見るならば樹立の前面は余に由つて直觀せられる。然し直觀せられざる他面が全き虛無として余の意識と關係しないのではない。余は想像の眼を以て直觀像として與へられざる他面の印象をも想像することが出来る。想像は已に述べたる如くその對象を失ふのではない。對象そのものは或る意味で知覺に於

けるものと同一であらねばならない。知覺の對象は已に述べたる如く感性的顯現的なる *Rosem* 即ち *Gestalt* であつた。想像に於ても少しく吾等が考察すれば直ちに明かなる如くその對象は常に知覺の對象と同一なる *Gestalt* である。余は知覺に於て直觀せしと同一の形像や旋律を想像の眼や耳に於てそのまゝに經驗することが出来る。かく知覺と同一なる *Gestalt* を想像し得ると云ふことは單に再生想像の場合のみでなく、想像一般の本質これを然らしむるのである。詩人が作詩する場合詩人の想像裡に去來するものは語と語の單なる結合でなく、印象の單なる再生でなく、詩人にとつて全然新たなるものが時としてはおぼろげながら時としては電火の如く全一の姿に於て生れ來るのである。かゝる自由なる創生想像に於て想像せらるゝものは、その本質に於ては知覺に於て直觀せらるゝものと毫も區別せらるゝ處はない。更にまた對象が知覺に於て感性的でありし如く想像に於ても感性的である。余は想像の眼や耳に於て知覺に於けるが如く全一の姿を想像し得るからである。

直接對象を體驗すると云ふ點に於て詩人の想像と吾等の知覺と毫も異なる處がない。然しかく云へば知覺には想像と區別せらるべき對象の直接的顯在性があるではないかと云ひ得るであらう。寔に已に述べたる如く對象の直接顯現することは知

覺の特色でありそれに由つて他の知覺ならざるものと區別されねばならなかつた。さりながら此處に余の云ふ Gestalt が二者に於て同一であり得ると云ふのは毫も知覺の特色を否定することではない。單に對象に同一なるものあることの主張に過ぎない。抑も知覺に於て Gestalt が顯在的であると云ふことは對象そのものに關して新しき性質を賦與するに非ることは多くの論理學者の認むる處である。純粹なる對象としての Gestalt を考ふれば感性的なる性質規定に由るのみである。顯現するとせざるは Gestalt の本質に何ものを増減する處ないとも云ひ得やう。知覺表象と想像表象とは Gestalt を或る意味で直觀し得ると云ふ點に於て全く同一と云はねばならない。それ故知覺表象を創生表象と呼べると同一の意味で想像表象をも創生表象と呼び得るであらう。

かくの如く想像表象と知覺表象が同一の Gestalt を持ち同一の創生作用プロダクツェオンに外ならぬとすれば二者の性質的區別は除き去られて想像表象は知覺表象の特段なる場合と云ふ様に解せられやう。確かに想像はその對象を知覺のアスペクトに於て示し想像對象は知覺對象のアスペクトに於て現はれる。想像對象は知覺對象の特段のアスペクトと考へられ従つて知覺が獨立せる體驗なると同様の意味で知覺の外

に想像の獨立すること許されず、かくして想像は可能的知覺の中に自らの對象を見守る作用に外ならないと云はれやう。即ち想像は知覺に依存し二者はもはや本質的に對立すること不可能となるであらう。

常識に即すれば吾等がより多く現實の「生々々しさ」と直觀的になるとに執着する余り想像は知覺に依存する二次的のものとも考へるであらう。然しながら夫れと同等以上の確信を以てそれとは反對に却つて知覺が想像に依存し居るとは云はれぬまでも、創生表象は想像に於て其の面目を明かにするものあることを云ひ得やうと思ふ。知覺はその對象性が現實的であるだけそれだけ主觀に對して抗束を與へる。主觀は殆ど自ら翻へる餘地なきまでに顯現者のために壓迫せられる。眼を開けば色あるもの形あるものを見ざるを得ない。耳を向くれば音あるものを聽かざるを得ない。この故知覺に於て創生表象はしばしば基礎たる色や音の單なる感覺より漸く Gestalt の全一に達することがある。奏樂に熟練せざるものは音譜に表はれし一々の音の把握に由つて漸く全體の旋律に達することがある。然しながら作曲家にして一々の音の把握より漸く旋律の創生に到達せるものあると云はれやうか。勿論作曲家の意中に音の單一表象が想起せらるゝことあるは事實である。し

かし作家の努力は單なる音の想起に向けられるのでなくて驚くべきその創生力を以て常識的なる現實觀にとつては殆ど虚無とも考へらるべき想像の世界より新たな Gestalt を創出することに費される。靈感の支配の許に新なる創生を進め行くのが藝術的天才の特質である。知覺にのみ即して想像を見んとすれば彼は二次的のものより出發することにならう。しかし藝術家に於ては始めより一次的なのである。彼が心の琴絃に於て妙なる旋律を奏で始めしより彼の音楽が聽衆の知覺に壓し迫るまでは連續的なる創生作用の發展である。創生表象の特色たる自發性が最も明瞭に想像體驗にて示さるゝことは此處に多言を費す迄もなからう。かく創生表象は想像に本來的郷里ヘイムを有するのみならず、吾等が知覺に於て對象の Gestalt を直觀すると云ふのも知覺の平面にのみ即しては如何にしてその要素より次元を異にせるものが創生せらるゝか解し難い處であらう。知覺の直接なるおし迫りの只中に於ても想像的なる創生力が働く。ideal なる Sein を顯在的に直觀し得るのも全くこれがためである。例へば畫家は丘に亘む樹立を見ても野を超へてゆく小みちを見ても、それに存する極めて要素的なるものゝ上に彼の驚くべき創作を始める。彼が自然を觀照すること自身が Gestalt の創作である。彼が畫筆を採つて描

くのは彼が自然の觀照を通してその中に見出し想像の世界を一層具體化してゆくことの段階に過ぎない。自然の觀照が創生作用に由つて成り立つと云ふのは已に藝術的創作の一步であると云はねばならない。自然が直觀に於て自己に直接であるのはその創生力が一層内生的であると云ふことである。かくて自然に對して觀照を深めてゆくことは一層深く想像の世界に自らの姿を見出すことになるであらう。この意味で自然は限りない想像の鏡である。

知覺の對象は直觀に於て顯在する。然し此現實性は想像に打克れることによつて直觀の中にありながら次第に存在性より解放せられてゆく。云はゞ一度は知覺判斷と結合せる *Gestaltvorstellung* が想像の豊なるうるほひに由つて知覺判斷との膠着を解き放たれる點で藝術的對象が單なる知覺對象と區別せられる。余は亦此點に由つて知覺と想像とが本質的に區別せられるものと思ふ。即ち知覺體驗は知覺表象 (*Gestaltvorstellung*) と存在判斷との結合體であるが、想像體驗は *Gestaltvorstellung* を知覺と共にしながら對象顯在の確信従つて存在の判斷を排除してゐることのである。吾等は想像の眼や耳に由つて音楽や形像を直觀的に體驗する。然しかゝる對象がそのものとして存在するや如何について全く問ふ處ない。若しそのものが存

在するとしてもそれは全く偶然的の事實に過ぎない。従つて想像に於ては對象の顯現より來る何等の拘束を受くることなく對象の性質的規定に關して全然自由を持ち得るのである。このことに従つて幻覺をよく知覺より區別することが出来る。幻覺は純粹なる *Gestaltvorstellung* が謬つて知覺の抗束を自らの中に見出した場合である。確かに眼前に顯在して余に迫り來る直覺像がある。然しながら幻覺には知覺判斷の本質となるものが排除してゐる。知覺判斷は一の判斷作用として判斷せらるゝものを内在的に含む。判斷せらるゝものは *Gestalt* そのものならずしてそれを支持すると考へる *das Reale* である。*das Reale* は知覺判斷に由つて甫めて吾が前に在るのである。然るに幻覺は *das Reale* を含むことはない。何となればそれは唯表象せられたもので知覺判斷せられたるものではないからである。幻覺は想像體驗に屬するものである。

かく知覺には知覺特有なる判斷の加はること、想像に於ては該判斷の抗束より自由なることに由つて二者は明かに區別せらるゝ次第である。然しながらかゝる區別がこの節の出發點に求めんと欲したる二者の積極的特性だと云はれやうか。想像、表象はその積極的規定に由つて知覺、表象と同一なる *Gestalt* を持ち本質的に同

一作用として考へられた。今其本質的なるものゝ上に立つて全一體験としての知覺と想像を比較すれば再びかゝる消極的比較に陥らざるを得ないのであらうか。

四

知覺と想像の本質的區別は對象の顯在に對する確信シラウベの有無に存するとすれば確信は二者を區別する唯一の契機となるわけである。然しながら余は確信を持たざることに由つて消極的に規定するは猶想像の本質を闡むるに不十分と思ふのである。

凡そ何事かに確信を持つとは何等かの *sein* に對して翻へる能はざる意識を持つことであらう。然しこの意識は *setzens* そのものを外より抗束するのでなく、*setzen* の本質即ち肯定否定に關する主觀の全般的態度を表示するものでなければならぬ。知覺が對象の存在に關し否定すること出來ないと云ふのは對象顯在の *setzen* について翻へり能はぬからである。これに反して想像では常に翻へり得ることの自由を持つ。自由を持つは *setzen* に對する確信なき所以と考へられる。さり乍ら想像に確信と云ひ得る意識が如何なる意味に於ても缺如してゐるであらうか。

マイノングは其著“Über Annahmen”に於て肯定否定を持ち乍らその決定に確信を
 持たざる意識をアンナーメと呼び肯定又は否定對象の單なる意識として凡ての判
 斷就中否定判斷の前段に見ることが出來ると考へ更にはこれを擴張して Spiel や
 Kunst に於て或る solzen をさながら然るかの如く假定しながらその實それに對す
 る確信ベクシムを缺如し居るものをアンナーメと呼び得ると云ふのである。マイノングの
 云ふアンナーメとは確信なき判斷即ちその意味に於て消極的に規定せられたるゾグ想
 像利斷ソルタルターである。一般判斷就中否定判斷の前段に於てアンナーメの存することに關
 しては此處に委しく論じたくはない。已に Gestalt の直覺に於て存在性より離脱せ
 る對象 Sosein の顯現ある限りマイノングに由ればアンナーメがあると云はねばな
 らなかつた。然し余は創生表象又は Gestaltvorstellung の名の許にかゝる直觀作用
 を考へ來つたのは、表象とも又判斷とも性質的に區別せられると云ふアンナーメに
 疑問を感じてゐるためであつた。此處では只マイノングの所謂 Spiel や Kunst
 に見出さるゝ想像判斷ファンタジエールとそれに對立する現實判斷との區別が余の此處に吟味し來
 れる知覺と想像の本質比較の問題と觸れ合ふ限り考察を加へたいと思ふ。マイノ
 ングは次の様に云ふ。遊戯スピールに於て小兒が自らを又は自らの持物を何ものかに擬へ

て嬉戯する場合現實的に然ると云ふことに關しては何等の確信を持たない。小兒はよくそれが擬へであることを知つてゐる。とは云へ單なる表象ではない、それは *Sosin* の擬へであるからである。それ故遊戯に吾を忘るゝものゝ知的狀態は「判斷よりは少くなく、表象よりは多い、従つてアンナーメでなければならぬ。藝術もこれと類して例へば演劇を演ずるものは自己の演出する人物に自らを置き換へ彼と人物とは同一的になる。然しながら猶その同一ならぬことを意識する以上置き換へる所以のものは一のアンナーメに過ぎない。この點では敘事詩人も敘情詩人も同様である。Fiktion は常にアンナーメである。畫家音楽家等に於ても亦然る狀態が見出さるゝ故に、藝術家の狀態に向つてアンナーメは特色あるモメントたることが許されぬばならぬ (Über Annahmen, 2 Aufl. S. 112—116) と云ふ。さりながら遊戯や藝術に於て果して如何なる意味でも對象に關する確信を排除して居るであらうか。劇詩ファウストに於ける主人公の苦悶を見てファウスト其人の現實的苦悶を確信するものは眞にファウストを觀る人ではなからう。然しながら猶或る意味でファウストの苦悶が現實してゐることを吾等のこころ根の中に見出し得ぬであらうか。お伽噺に吾を忘れて夢の國に遊ぶものにとつて夢の國夢の叫きは或る意味で事實ではな

からうか。ダンテ、ミルトンに於ける地獄の呪ひは單なる惡夢の一幕に過ぎぬであらうか。人間の原罪のアダムとイヴにあることは古代人の單なる幻想に過ぎぬであらうか。勿論すべてかゝることは吾等が普通云ふ意味での事實ではない。現實に對する架空のイリュージョンに過ぎないだらう、然し現實と架空のイリュージョンの差別は常識で考へるが如く判明せるものではない。赤裸のままの意識に立てば空想も現實である。想像の世界は現實の世界が何ものかを不足することに由つて現實の識域以下に降り去つたもの、或は單に氣まぐれなる表象がとりどめもなく演ずる幕の一くさりではない。想像の世界に「不死の Gestalt」なるプロメシウス、アンチゴネ、ドンキホーテ、ハムレット、ファウストが住む。詩人が現實の人に對する。如く彼等と住み彼等と語り彼等に於て現實的な苦惱を経験することは、想像を以て現實に不足を負へるものと觀する人々にとつて誠に不思議なこと、云はねばならない。詩人にとつて想像も猶現實である。かく現實の抗束を超越しつゝ、しかも或る意味で根源的な現實にイむ想像界に於いて、其處に猶對象に關する一の確信ゾラッペンもないと云ひ得るだらうか。ファウスト劇に於てファウストの苦悶が事實でありハムレット劇に於てハムレットの悵鬱が事實ではなからうか。デルタイの云ふ如く「詩人は現實よ

り美の王國を切り離す。かくして詩の *Transepäno* を建設し靈感の瞬間に於てそれの裡なるものゝ姿は實在性リアリテイトを持つ。此處に現はるゝイリュージョンは遊びに耽る小兒にも似つかはしい。小兒は人形や動物のいのちと信じ、詩人は彼の *Geistes* の現實性を信ずる。[Dilthey, *Dichterische Einbildungskraft und Wahnsinn*, S. 29] のである。但しかゝる確信は例へば眞晝に曝されし神秘の灯の如く知覺の許に抗束すれば直ちに生き生きしさを失ふであらう。想像に何等の確信グワッペンないと云ふのは知覺の立場より見るからである。想像を生ける姿に於て見んと欲するものは先づこれを知覺より解放しなくてはならない。

想像判断が現實を超越してしかも根源的なる現實に由つて支持せらるゝ時想像判断は想像意識の全般を支配し翻へらんとして翻がへる能はざるものが其處に現はれる。かゝる直接なる體驗に於ては想像感情想像意志の如きも見出される。詩に於て吾等の經驗する感情や意志は現實に經驗するものと同一ではない、現實の許に抗束すれば寧ろ消失し或は却つて反對的性質を示すものである。想像感情想像意志は想像判断と同じく現實より何物かを不足することに由つて纏せ易く移ろい易き實在性を持つと見る可きではない。想像體驗は一の完全なる意識である。

さり乍ら余がさきに知覺表象と想像表象の積極的比較に於て陥りしと同様なる道理に再び此處で陥らざるを得ない。何となれば一方で知覺と想像は同一アスペクトを有する對象を持ちながら他方に於てまた對象を異にせねばならないからである。余が想像の世界に於て遭遇する種々なる對象又は出來事は到底そのまゝ此世に現實し得るものではない。然しながら對象のアスペクトが等しきのみならずその存在に關して二者の間に等しく確信が存するとすれば二者の對象は本質的には全然區別し難いものとならう。例へば「黄金の石を敷きつめルピト」の壁をめぐるせる新エルサレムの町は此世に存在するものではないが、しかも存在することが必然的に不可能のものではない。猶それは灰色の淋しきふる里の町が現實に存すると同様の意味で想像の世界に實在すると考へられる。かく知覺と表象が對象性を一にすることを許すと共に余はまた知覺に最も接近せる幻覺につきても猶これを知覺と呼ぶことなく知覺體驗より區別して純粹なる想像體驗に保留すること、即ち知覺せらるゝものは *das Reale* であるが幻覺せらるゝものは同様な意味での *das Reale* を持たないことを認めねばならない。かくして知覺せらるゝもの想像せらるゝものゝ相異は一に對象性の相異に存せねばならぬであらう。

かくの如く感性的なる對象性は二者に就いて同一であるにも係はず猶二者に由つて差別されねばならぬと云ふことは容易に解き難き逆理である。余はこの解決は知覺及び想像體驗の分析を更に進むことに由つて見出さるゝものでなく寧ろその総合的見地に由つて甫めて明かにせらるゝものと思ふ。総合的に觀察すれば意識の性質的區別は常に統一の特色にある。統一の特色は即ち方向の特色である。知覺に由つて知覺せらるゝものが *das Reale* であると云ふのは已に知覺が特有の方向たることを語るものである。Gestalt は直ちに *das Reale* ではなく *das Reale* は Gestalt の背面に立つてより高き客觀化を吾等の思惟に要求するものである。カントが知覺予料の原理に於て「すべての現象に於て感覺の對象たる *das Reale* は内包量即ち程度を持つ」と云ふのは感覺對象につきてなく知覺對象として始めて許さるゝことであり知覺對象は予料の原理に従つて自然科学的實在構成の方向に純化せられるのである。而してナトルプの如く意識現象は對象の客觀化を逆にせる主觀化の方向に甫めて現はるゝものとすれば知覺は可能的なる *das Reale* を顯現的なる *Sein* へ還元する作用に外ならぬであらう。これに反して純粹なる想像に由り思念せらるゝものは知覺對象としての *das Reale* ではなく Gestalt のものゝ發展——Ges-

faltungに由つて構成せらるゝ藝術的對象の世界である。想像の Gestaltungはまさに知
 覺の Anticipationenと相應する原理である。等しく客觀化と云ふもその方向を異にし
 てゐる。かゝる藝術的對象の世界を原體驗に還元する作用が純粹なる想像作用で
 ある。想像の Gestaltungと知覺予料の方向する處即ち二者の積極的特色を示すもの
 であり、この本質的特色は一を以て他より由來せしめんとする(生成的にせよ本質的
 にせよ)見地より到底明かになし能はざるものである。二者夫れ自ら全き意識であ
 る。一を以て他に還元することの出來ない自立的體驗である。それ故二者は廣き
 意味の意識現象中に並列の關係を持つべきものでなく寧ろ次元を異にせる意識の
 縦面であると思ふ。換言すれば意識の深度又は擴張の相異である。事實的存在の
 範圍に抗束すればこれに對して抗束せられざるものはすべて空想となり夢幻の世
 界となる。これに反して事實の抗束より解放すればすべては生き／＼として現實
 となる。フアウストの苦悶は小さき自己に於てはフアウストの苦悶であるが深き自己
 に於ては自らの苦悶である。吾等はフアウストに於て自らの苦悶を經驗するのであ
 る。それ故に意識の直前に立つて事實と非事實の抗束を撤する時は想像に思念す
 る處直ちに消失するとは云はれぬであらう。實行が事實を生む如く想像が事實を

生む世界がより深き世界である。意識はその中に意味内容を含むがその意味は直接なる想像に於てはすべて事實でなければならぬ。マイノングの主張する如く對象は純粹の姿に於てすべて *Sosein* より構成せらるゝものとすれば所謂アンナーメの世界は想像即現實の世界として判断より次元を深くせるもの順つて彼の主張する如き判断意識へ向つての完成の *Unterstufe* 又は發展の *Vorstufe* として見るべからざること明かであらう。

ノヴァリスの青い花や「さまよへる和蘭人の淨き乙女は外界よりもたらし來れる素材の上の建造物ではなく生粹の故郷ヘイムを想像界に持つ。これ等のものと此世でめぐり合ふ機會は到底吾等に恵まれぬであらう。が吾等の想像界に還る時其處に彼等の搖輿が見出されぬであらうか。(完)